

飛鳥

2019年

萌芽号

第198号

かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所

飛鳥出版室

発行人 永野 正将

〒780-0945 高知市本宮町65-6

電話 088-850-0588

e-mail:info@asuka-net.jp

http://www.asuka-net.jp



満開の桜に桐見川の沈下橋、絵になる風景。

土佐路は今、春爛漫。人っ子ひとり居ない

道端の桜並木を独り占めの気分で眺める。

テレビで見た都会の桜見物の人波を思うと、

何というぜいたく。

田舎っていいですねえ。

「土佐寿司の本」嬉しいお便り	2
いろいろかいろ 話	安藝眞一 4
キルギスタンからコンニチハ ㊦	氏原名美 5
新聞余話⑨	大澤重人 6
おのころじま奮染記 16	田島征彦 7
わが家の太郎 ㊥	永野雅子 8

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

松崎淳子著

「土佐寿司の本」 ご購入の方々から 嬉しいお便り

「土佐寿司の本」、おかげさまで皆様に喜んで頂きました。お便りの中から、一部をご紹介します。



「土佐寿司の本」必然的な出会いでした。

今日の朝、スーパーで室戸沖でとれたサバを晩ごはんにしようと買っていました。昼から編み物の本を買いに本屋に行ったところ、入ってな気に斜めに目線をやると、そこにこの本があったのです。見本を読む、読む、読む!!

先生が「これを一冊もっちゃよきなさい、それで作りなさいよ」と言われたような気になって購入しました。

自分でも買って食べるばかりでなく作りたいなあと思っていたところへこの本で、早速煮付けのサバは塩をされ冷蔵庫へ。明日は初めて自分で作ったサバ寿司が食べれると思うとワクワクします。

実は昔、私の家では盆、お正月、神祭、慶弔と折々に親戚のおばちゃん達が集まっては皿鉢を作っていました。その中ですごく酢合わせの上手でおいしいお寿司を作ってくれるおばちゃんがいいたのです。自分が嫁に行って子供達に作ってあげようと思った時、五目はどうにか出来るものさば寿司や田舎寿司は出来ませんでした。

Uターンして4年前に帰ってきた時にはおばちゃんには会う事なく亡

くなってしまいました。

心残りに思っていたところへ今日のこの本との出会い！そして本の中に私の町のお寿司が載っているではないですか。そうそう田野はね、金時豆と緑には人参の葉でちらしではなく型押しのお寿司で皿鉢に入っていました。サバ寿司と押し寿司は私の大好物だったので、今年の正月料理は決まりです。私の作った皿鉢で子供達にもてなしたいと思えます。有難う先生!!

この本を作ってくれた皆様に感謝です。
田野町 S様



おどろき 桃の木 山椒の木。

いやはや「おすし」がこんなに売れるとはびっくり仰天。毎週毎週ベストセラーズ。

失礼ながらこんなにおすしが売れるとは？おどろき。ほんで「おどろき 桃の木 山椒の木」を思い出したら。けんど「椒」の字がしようむつかしかった。「しょ」かと思つたら「しょう」であった。もういちど「すし」のビデオを見た。万歳、拍手喝采、お祝いお慶び申し上げます。

須崎市 T様

大変美しく 美味しさが伝わる本です。

亡き父母とも全くの下戸でしたが土佐の出身でしたので、皿鉢料理、菓焼き鯉タキなど食する機会がありました。高知料理は好きです。土佐の食文化の興行き、素晴らしさを再確認しました。

ご高齢にも拘わらず 生き生きと活躍の様子、松崎先生の生き様に感動しております。

シルバーの私も見習って、少しは世の中のお役に立てるよう頑張ります。
東京都 T様



このたびはご出版お目出とうございます。

取り急ぎお電話したとき、若々しいお声にてつきりお嬢さんかと思つてビックリでした。いつも明るいお声に嬉しくなりました。只今一気に読ませて頂きました。

高知の伝統的食文化に対する先生の思い入れに感銘致しました。土佐寿司を愛用されるお気持ちが生き生きと表現され、分かり易い解説はすしづくりの好きな妻（自己流の手巻き、かきませずしです）にも読ませ、DVDを見せてやりたいと思つてい

ます。そして持ち運びに手頃な大きさ。正方形の粋な装丁、写真と活字の調和もスマートで上々の出来栄えです。

又、別冊の先生を愛され、慕われ、尊敬される多彩な人達のエッセイ集は前向きで明るい先生のお人柄が偲ばれ面白く読みました。

そこで好きな宮沢賢治にあやかっ
て駄句を呈上。

兩ニモマケズ 風ニモマケズ
オリヨウリヒトスジ 松崎セン
セイ

ツメタイヨウデ アタタカク
キビシイヨウデ 情ガアル
甘辛酸味ガヨクキイテ

噛メバ噛ムホド アジガアル
ハナシノワカル 土佐オンナ
サウイフアナタガ ダイスキダ
(寅ニハマケル 未ドシノオト
コ) 香川県 Y様

『土佐寿司の本』は、松崎先生いなくしては出来ない、郷土食の本として全国でも例のない出版物と思います。記録性はもとより、松崎先生のスピリットがいつぱい詰まるところが素晴らしいです。

ランダムですが、元編集者として

唸ってしまつた箇所をいくつか挙げ
てみます。

46ページの「土佐には一年中使える
独特の『酢みかん文化』があるき
お寿司が美味しいがぞね！」は、土
佐の寿司文化の根底に「酢みかん文
化」があることを、話し言葉で表現
しているところがいいですね。

その次の「土佐の酢みかん文化を
楽しむ会」の記録は、まさしく土佐
の酢みかんの記録として圧巻です。

56ページの「土佐の寿司文化を育
てたがは『おきゃくぞね』、58ペー
ジの「宴の進め方」は、写真として
も見事で、内容も興味深いものです。
式三番を詠うというのは農村部でも
宴会の作法として普通なのか、城下
町特有のことなのか、知りたいところ
でもありません。宴会に参加してい
る男性陣、立派ですね。

62ページの「私の台所」の冷蔵庫
の写真、記録性という点でも、写真
そのものとしてもすばらしい。酒飲
みとしてプレミアムモルツがあるのも
嬉しい。

冊子『松崎先生に教えていただいた
こと』は、本体の『土佐寿司の本』
が編集された背景を様々な角度から
述べて先生のプロフィールを浮き彫
りにし、読んで楽しい内容です。

その初めの「おまさんが今まで書

いたり……」という土佐のお国言葉、
読む方もその言葉の韻うたきに「おそれ
いる」思いです。

19ページの「笑顔も、声も、仕草
も、チャームिंगな人間的魅力いっ
ぱいの先生」という言葉、深くうな
ずけます。

これを含めて、土佐に松崎先生と
いう地域の食文化（郷土食）に深い
愛情と研究の精神をいっぱい持った
方がおられたこと、土佐の幸運だと
思わざるを得ません。その精神も次
の世代に確実に受け継がれていくこ
とでしょう。

茨城県 M様

私はグループホームKでJさんの
担当をしております。

先日、Jさんが久しぶりに明るい
お顔で、新聞の記事を職員に見せ、
「同級生です。久しく会えていない
けれど……」と伝えてくださいました。

松崎様が出される「土佐寿司の本」
を読みたいと、いきいきした表情を
されたので、早速本を買い、お渡し
すると、普段は自室で一人で過ごさ
れたり、寝られているのですが、ホ
ールに出て来られ「このお寿司はき
れいですねえ」「美味しそう！」と
ページをめくり、周りの方や職員と

の交流の場を持つ事ができました。
しかし、Jさんは気持ちの落ち込
みもとても多く、元氣のない日が多
いのです。文通をされていたご友人の
方との交流も途絶え、孤独感が強く、
日々何かJさんが楽しく思える事や
嬉しく思える事があればいいなと探
していました。

今回、「松崎様へお手紙を送って
みませんか？」と提案したところ、
「書いてみたいですよ！」と力強いお
返事を頂きました。

書くまでに何日も何日も気持ちが
向くまでかかりました。でもJさん
の想いは強く、書き始めると4枚も
書かれていました。

Jさんと一緒に「土佐寿司の本」
をベッドに並んで座り拝見しまし
た。

二人で「サバ寿司、本当に美味し
そうだねえ」「この玉子のお寿司
も食べてみたいなあ」と笑顔で話
されていました。楽しい時間を過ご
しました。

私はもし松崎様がJさんにお会い
してくださる事が可能であれば、ぜ
ひお元氣なうちに、近い内にとっ
ています。それが私の一番の夢で
す！

高知市 D様

いろは いろは

その二十四

花、遙か

安藝眞一

立春も中端を過ぎて、月の末に差しかゝる。「梅、ほころぶ」の報らせをテレビで観たのは、この月の始めであったか。冬空に咲く一輪の白梅を見た想い出は、遠く幼き日に遡る。

太平洋戦争が、まだ始まっていなかったから、幼稚園に入ったばかりの五才のころか。幼稚園は追手筋の寺にあり、朝に夕に、仏の教えが歌になった。「えんそく」

の日、わらわらと集まる幼児の群れが幾人かの先生に囲まれて歩きだすは西の高知公園。道端は記憶にないが、たどり着く公園の門をくぐって、坂一つ登る。二ノ丸の花壇。東の空に向いた花もない花壇のぶどう棚の下に寄りそって、ただただ嬉しく、寄せ合い押し合いついてベンチに並び合う。記念撮りもして、お弁当を食べる。右を向いても左を向いてもただ嬉しく、先生達の笑い合う顔が重なりあつて日当りの中で動いて居た。弁当が終つて整列、つゞいて出発、山路のような道をおどおど歩く。「ここが杉の段」という。薄暗く、しめつた道の左右に杉の大木が並んで立ち、ひんやりした風が通つていく。「杉の段」と覚えて、何やら胸に落ちる納得。いつか見た西畑の人形芝居に見た景色を「段」という云い様に、芝居の中を歩いている感じが気に入つた。

歩きつづけて、やがて道は左にゆつくりと空がひらいた。日光が一面に降りそ、いだ広場に出る。「ここが梅の段」。そう云つた先生の声のひびきが今も耳に残つていて暖かい。「梅の段」と自分の口で云つてみた。南の空と西の空が重なり合つて立ち昇るような光が

あつて、辺り一面に梅の木が並んで、花が咲いている。風の匂いも光の暖かさも気分よく、並ぶ梅の樹を見上げて砂利道を歩きまわる。南の空はほんやりと、それでもちゃんと明るく光の輪の中に小さな山なりが浮んでるように見えた。西の空は夕暮れには充分遠くへ続いている。めぐる梅の枝は手が届く高さで花開き、香りをまぜこぜにした風が、友達の声を乗せて、ゆつくりと頬をなでていく。

長じて、「梅は咲いたか、櫻はまだか」という歌を知り、早春の気分を、うまく云い当てているとも思ったが、梅が咲いたばかりの時に桜をなお欲しがる風情が何やら、うっとりという限りで、梅も桜もこき混ぜて、手の内一杯の春を欲しがる輩のことかと思ひ返したりもした。それも桜が咲くと二分咲き三分咲き、五分咲き、さて七分咲きと追いつがり、やがて満開で満願成就。歌はそこで終り「桜は咲いたか、藤の花は」とは続かず、夏の花はと思うすべもない待ちこがれる花への思いは満開の桜と共に終つてしまふ。

今年も桜がやってくる。桜前線と季節風並みの称号が与えられる

と前線の上陸はサイレンを鳴らす様に日本中に伝わって、刻一刻とその足取りが列島にひびき渡る日がまたやつて来た。

今年の桜は?とは思ふ。まだ見ぬ地の名木のあれこれを心配している。ただ、年老いると、これからの桜より、過ぎし方の桜の色が鮮やかで、めぐり歩いた四国の山々、息を凝らし探した洛北の花と往時の記憶の温度で眺め返す花の風情がなつかしい。いずれもカメラにおさめているもののファイルの発色とは、又違う記憶の残像が飛び切りの一枚となつてよみがえつて来る。その時々々の年令。返る事のない若さに起つたいくつかの出来事を重ね合はして妄想の中の花々は美しい。花見を繰り出して眺めるよりは、記憶の花道に踏み込む楽しさの春がやつて来る。



日本語教育事情

氏原名美

うじはら・なみ
越知町出身。北海道大学卒。キルギス国立ビシケク人文大
学教授。「キルギスタン」はキルギス共和国の通称の一つ。

娘の夫は大学で日本語を学んだ。日本語のクラスで担当教員に「なんで役にも立たない日本語なんか選んだんだ？」と聞かれたそうだ。その教員も大学では日本語を第一外国語として学んだが、卒業して日本語を活かせる仕事は日本語教師くらいのもだった。母校の教員として採用されたもの、あまりの薄給に「こんなはず

じゃなかった」という思いが強かったのだろう。二十年前のことだ。キルギスでは外国語は就職のために学ぶものという考えが一般的だ。キルギスに企業進出している国のことばは人気がある。外国企業で働けば高給取りになれる、というわけで、親たちは子供に大学で英語か中国語を学ぶよう勧めた。ちゃんと卒業後の受け皿を用意されているからだ。ところが二十年前は、大使館も企業進出もない国のことば、日本語は「趣味で」学ぶ言語と思われていた。

キルギス共和国内の日本語学習者数は約千五百人だ。これは昨年度の速報値だが、国際交流基金の一九九八年調査では七百二十一人だったから、この二十年間で倍増したことになる。もちろん、世界全体の学習者の増減に影響する数字ではない。しかし、旧ソ連ペレストロイカの時代に非正規ながら日本語教育が始まってからすでに三十年、爆発的なブームこそないがキルギスの日本語学習者数は右肩上がりが続いている。一度でも日本語を学んだことがある人口は概算二万人とかなりの数だ。キルギスは三百人に一人が日本語学習

経験者、人口比で見れば日本語学習者が中央アジアで最も多い国なのだ。

「役に立たない」日本語をなぜ学ぶのか。大学生の場合、一九九八年調査では国内での就職という回答もあるが、日本文化や日本の社会・経済・政治に関する知識獲得が上位に挙げられているから学習動機は「知的好奇心」だった。しかし、現在は目標が具体的に「日本語留学」のほか「日本語を活かした職業選択」を挙げるものが多い。近年は国際協力機構の経済支援プロジェクトからの求人が増え、優秀であれば就職先に困らない。「日本語でも」しっかりと稼げるようになったからだろう。

当然のことながら、しっかりと稼げる「日本語を生かした職業選択」に日本語教師は含まれていない。職場を何か所も掛け持ちしなければ食べていけない研究者や大学教員は学生たちに見向きもされない。現職の日本語教員も三十代半ばの中堅が専任のポストではなく縛りが緩い非常勤を希望する。仕事の掛け持ちが楽だし、あわよくば企業プロジェクトに採用しても

らえるかもしれない。この状況が続けば、日本語教育の現場には優秀な人材がいなくなってしまう。

「二〇一八年の骨太の方針」が発表されるや、キルギスでも、日本語はひらがなさえ習ったことがないという人々が日本に働きに行きたいと言うようになった。今後はまだまだ国際化には程遠い日本社会と日本を知らない人たちとの仲立ちが必要になるが、それができるのは日本語教師だ。母国の日本語人材を育て、日本人学生たちには日本語教育実習の指導教官を務めるキルギスの日本語エキスパートたちだ。日本は、キルギスに道路や橋を造ってきたが、キルギスと日本に異文化理解の橋を架けられるのは、自ら日本に興味を持ち、日本語を学んで、日本と日本語をキルギスの人々に紹介してきた彼らだ。日本語を選び、日本語教師という職業を選んできた彼らを失望させたくない。キルギスの日本語教育が人材を失ってしまう前に日本に何ができるか、考えてみたい。

原稿を書く仕事がしたくて、またま縁があった新聞社に入りました。30年以上新聞記者をしています。30年が過ぎて向いているとは思いません。人見知りをするし、目立つことも嫌だし、争いごとも苦手です。

大好きな仕事はありません。魅力あふれる人と1対1で会い、じっくりとその話に耳を傾けることです。関西弁で言う「感動しい」です。すぐに心を揺り動かされます。その感動を損なわずにいかに伝えるか。読んだ人が同じ感動を追体験できるように言葉をどう吟味するか。やっかいな作業ですが、それも結構好きです。

誰に話を聞くか。勝負はそこからです。まずは自分が面白いと思う人。さらに言葉や表情でリアルに体験を再現できる人なら最適です。そういう特性に恵まれた人がいます。

その人とは、駅前のホテルで待ち合わせしました。ちよい役でしたが、映画「パッチギ！」(2005年、井筒和幸監督)とその続編で見た、何か異物を間違って飲み込んだような怖さが強烈に印象に残っていたからです。

土平ドンペイさん(52) 〓 滋賀

新聞余話 ⑨

大澤 重人

インタビュー、好きやねん



ドンペイさんの連載紙面

県草津市。どれほどおっかない人が来るのかと身構えていたら、拍子抜けしました。吉本芸人のようにおもしろい人です。「強面は完全な役柄です。普段あれやったら怖いです」

その歩みがすさまじい。京都の大部屋俳優といって、スター俳優の後ろを一瞬通り過ぎるエキストラから始め、少しずつチャンスをつかみ、平成のVシネマでは、最も多く死んだ男という称号も。そして今は、NHKの大河ドラマや連続テレビ小説にも出演する、きりりと光る脇役として活躍しています。朝ドラ「べっぴんさん」では、憎まれる玉井役を演じ、お茶の間を歯ざしりさせました。

インタビューには難しさもあります。どの人もそうですが、過去の話だけに、思い違いがあったり、その人の中で事実の組み替えがあったりする可能性があるのです。可能な限り内容を裏付けていきます。捨てるには惜しい要素は「〜と記憶している」などと記述して残すことがあります。作家の村上春樹さんが地下鉄サリン事件の被害者から聞き取りを行った「アンダーグラウンド」では「人々の語る話は、その個々の話の文脈

の中で、紛れもない真実なのだ」というスタンスを取りました。

また、人の話の常で、時系列や話題が飛ぶこともあり。話が興に乗れば、腰を折らずに流し、テープ(実際は音声データ)起こしをするときに整理します。最近はその人の口調の再現にも気を配っています。

ドンペイさんからは2015年から4年かけ、インタビューを重ねてきました。この5年間で一番爆笑した取材でした。その歩みは、年明けから毎週水曜に、毎日新聞滋賀面で「わたしの歩跡」は「上がる人」と題し連載中です。新聞社のサイトで読めます。私のフェイスブックでも発信しています。

おおざわ・しげと

毎日新聞大津支局兼エリア編集委員。現在は、主に外国籍住民との共生をテーマに取材。高知支局に支局長、次長として計5年半勤務した。著書に『泣くのはあした―従軍看護婦、九五歳の歩跡(第26回高知出版学術賞特別賞受賞)など。

おのころじま 大奮闘記

ふんせんき

田島征彦

16. うんとうれしゅうなる!

(7) かわら版

小さい頃から、身の辺りの整理が、うまくできない。いつも散らかしっぱなしで、両親から叱られていた。こうしたエッセイを書くのに、資料を探しても、すぐ出てきたことがない。80歳近くなるから、今までの資料が多量に溜っている。それらは、整理もせず、ここに突込んであるので、途方に暮れるばかりだ。坂本龍馬を描いた絵が、高知県立美術館での征三との兄弟展の折に、関係者の報せで所蔵先がはつきりした。

ちょうど、その頃ばかりが、20歳代に描いた絵の所在を突き止めようとして、ちよつとした波乱をおこしてしまった。その時代にぼくは県展に「土佐の観光パネル」として、日曜市や闘犬

などの4点を組み作品として出品した。それが特選になって、県に買い上げてもらっている。その作品と再会したので、高知新聞の記者Tさんに調べてくれるようにお願いした。ところが翌日「大変なことが、発覚しました!」という連絡があり、新聞に大きな見出しが踊っているではないか!

「県展作品・187点、県が処分」「買上げ後『不用決定』—作家ら『侮辱』と怒り」

一九六〇年に県が買い上げた作について、記者が県の担当者に取材して明るみに出たのだった。



県は県展特選作品を毎年買い上げていたところ、溜ってきた作品を保管する場所がなくなってきたので、不用品として処分してしまったということだった。机や椅子など備品と同様に、芸術作品を処分してしまったのだ。

それを知った県展作家たちの怒りは簡単には収まらない。

高知新聞も、学芸部で、県「不用決定」問題取材班をたち上げて、連載を開始した。

「消された県展作品」という見出しの連載は10回も続いた。

そして、その最終回、10回目のタイトルは「うんとうれしゅうなる」

多くの20歳の時に描いた「日曜市」の絵をベツドの脇の壁に掛けて、「毎日、眺めようと、うんとうれしゅうなる」と言ってくれる老婦人が、所有してくれていた。作品はほとんど傷もなく、きれいに40年間も飾ってあった。

「えいろう。この絵を見よつたら、うんとうれしゅうなるがやき。」女性は満足そうに目を細めた。

多くの行方不明の「日曜市」から始まった新聞記事はこうして完結した。

ぼくは80歳の婦人に会って、サインのはいっていないなかった「日曜市」にサインを入れて、どうして彼女が所有することになったか、問うてみた。水商売の彼女が店を開ける前に、前の縁台で夕涼みをしていたら、向うから、県庁の人が、この絵をかかえてやってきて

「これをおまんにやらあよ」と言うて渡してくれたのだと。

不思議な話だが、本当のことだろう。

それから15年が経つ、ぼくの「日曜市」はどこにあるのだろうか??

ぼくの手に戻ってこないのだろうか??

たじま・ゆきひこ(染色家・絵本作家)

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十二回日本絵本大賞。沖縄県高江集落を通じて「やんばるの」を制作。5月完成。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

わが家の太郎 ④5

勘



永野 雅子

だから、いつもと違うものが進行方向を遮って、勘が狂ったのだらう。外に飛び出して吠えたというわけ。

「ウーツ、ワン、ワン、ワン！」
寒い夜中の二時、何事かと起きて行けば、太郎が庭の中をぐるぐる回っている。眼が見えないものだから、あちこちぶつかりながら尋常ではない。

うっかり手を出して興奮している太郎に噛みつかれるのも嫌だから、後ろから首輪を掴んでやっと家に入れた。

縁には太郎の寝床と食器を置いてあるが、そこへ昨夜から寒さ除けのダンボール箱を置いた。昼間遊びに来た孫の夏菜の発案で、「寝床をダンボールで囲ったら寒くないよね」

ということ、早速毛布で囲ったものを試しに置いてみたのだ。ところが太郎には見えないもの

だから、いつもと違うものが進行方向を遮って、勘が狂ったのだらう。外に飛び出して吠えたというわけ。

考えてみれば、失明して四ヶ月、何も見えない世界で太郎なりに日々の生活をしてきて、食事も庭に出るのも勘を頼りに出来つつある中、行動範囲の中にいきなり異物が現れると混乱するのは当然のこと。

「ごめんね。何もわかってなかったね。」
と、謝って箱を撤去。

さてそれではと、小さな湯たんぼがあつたので、湯を入れてタオルに包み、寝床の端に置いてみた。自分では「太郎のためにここまでやってるのよ」という自己満足。

あくる朝、湯たんぼに体を添わせて眠っているかと思いきや、離れた所にまるで避けるようにして寝ているではないか。

まあ、可愛くない！これも太郎

にとつては迷惑千万なことらしい。息子に言う、「柴犬は寒さに強い、大丈夫やろう」

この頃は散歩も行きたがらないので、庭をうろうろすること、良しとした。庭に出るにはガラス戸を上手に開けて、ピヨーンと一気に飛び出る。

運動は少ないのに食欲は旺盛で、おから料理もせつせと作っている。

肝心のうんちは、今までのように決まった場所ではなく、あちこちでやってくれるので、朝一番の仕事は「うんち探し」。ビニール袋を持ってキョロキョロ、夜は懐中電灯で照らしながらうろうろ。ご近所の方はどう思っているだろうと気になる。

※

そろそろ暖かくなってきて、俄然片付けモードにスイッチが入った。



押し入れや棚の中を取り出し、分別して仕舞った。長年気になっていた所がスッキリしていい気分。「整理整頓はこまめにやることよね」などと、自分に言っただけで聞かせ

そこまでは良かった。ところが、大事なものがどこへ仕舞ったかわからなくなつて大慌て。あちこち探すが見当たらない。いつものところから別の場所に変えたただけこの始末。

どうやら太郎の勘と一緒。今まで通りが一番良いらしい。

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役